

グローバル化時代の大学と多文化的想像力

亀山 郁夫（東京外国語大学外国語学部教授）

解題

20世紀の90年代から著しい加速化をとげたグローバリゼーションは、資本、人、情報の移動と流通が、空前のスピードによって実現可能となった状況を示している。そこにあっては、時間の短縮化と、軽量化、経済的効率性が絶対的な価値基準として特権化され、これまでの国民国家を基盤にした世界秩序に終止符が打たれた。歴史的にはそれが、アメリカ資本主義（というより世界の多国籍企業）の世界制覇、アメリカ流のデモクラシー理念の普遍化という野心のもと、ベルリンの壁の崩壊、ソヴィエト消滅による冷戦構造の崩壊によって促進されたことはいうまでもない。地球レベルでの政治の骨組みが崩れたことで、地球のいたるところで歪みや振れが生じ、グローバル化、一元化に抵抗しようとするものに対し不条理ともいえるべき暴力が行使され、夥しい矛盾と悲劇を生んでいることも紛れもない事実である。しかし、10年近くにおよぶそうした混沌の現実を前に、今新たに、アメリカ的デモクラシーの原理が相対化され、それ自体が無前提に唯一無二の価値尺度とはなりえないことが明らかになりつつある。グローバリゼーションの特徴は、さまざまなレベルから性格づけできる。言語事象としてこれを見るなら、第一に、世界に共通するコミュニケーション言語としての英語による世界一元化。次に、資本と情報の局地的集中、偏在化という事態。付言すれば、資本と情報の局地的集中が、予想もされなかった社会統合の破綻を顕在化させ、その事態を、封建時代への逆行と指摘する声もある。貧困層の増大、犯罪問題、児童虐待などの噴出もひとしくグローバリゼーションの問題と切り離して論じることは不可能である。また、主としてインターネットによる情報化は、これまで隠されてあった映像や表象に対する潜在的な欲望を白日のもとにさらし、その欲望は日々エスカレートし、新しい形態の犯罪を生みつつある。では、そうしたグローバル的一元化に抗する動きは、いま、どのような状況にあり、今後、どのような方向をめざすことになるのだろうか。イラク、チェチェンの例を挙げるまでもなく、世界ではナショナリズムの運動が、かつてない激しさと勢いを増し、正当化されている。反グローバリズムの運動は、ナショナリズムへの回帰と結びつき、地球全体にさまざまな対立を生んでいる。ところが、そのナショナリズムをリードしているのは、しばしば、グローバル化を推進する資本と富へのあくなき欲望と同質のもの、ないしはその裏返しである場合が少なくない。つまり、ローカリズムやナショナリズムは、うちにグローバリズムの欲望をもう一つの自己（alter ego）として抱え込むことによって、もはや過去において定義された概念とは似ても似つかぬものに変質しているのである。そこに現出しつつあるのは、単純にナショナリズムの台頭という以上に、さまざまな複合的なモメントを抱え込んだローカリズムの《異化》という現象だった。ローカリズムの《異化》とは、ある意味での鏡像現象であって、グローバリズムとの深い共犯的な関係のうちに成り立つ現象である。グローバル化は、諸地域のマイノリティたちの感受性、知のあり方に影響をもたらし、その中で自立したミクロコスモスを形成し、かつ自立的なシステムを機能させてきた彼らの生活様式を一変させた。世界の多くのローカルな地域が、グローバリゼーションの巨大な鏡にみずからを映し出し、そこに映し出された自分との共生を余儀なくされるにいたったということである。状況はきわめて悲

劇的である。しかも、グローバリゼーションとローカリゼーションという二つの相拮抗する力は、地理的レベルでの断絶に劣らず、一定の地域内における世代間の断絶をも引き起こしている。一元化は、あらゆる階層での多元化、分断化と同義語となっているのだ。私がここで、問題にしようとしているのは、まさに知の継承という問題意識によって照らし出されたグローバリゼーションの意味である。この世代的な断絶は、大学における教育・研究の根幹に関わらざるを得ない重大な問題をはらんでいるように私には思える。大局的に見るならば、それは、これまで大学での教育が自明のものとしてきた歴史、哲学、文学などの人文諸科学が、市場絶対主義、経済効率主義のもとでいまだかつてない危機にさらされている事実と深く結びついている。グローバリゼーションと教育崩壊がどのようなかたちで現出しているか、リッカルド・ペトレラにしたがって性格づけてみよう（「教育に忍びよる5つの危険」）。

1、人的資源を経済商品とみなし、そのための育成手段としての教育が最優先される。2、教育の目標が、金融の論理によって決定され、それ自体、市場として扱われる。3、教育が、他者との共生を実現するための知の涵養ではなく、他者との戦いの武器として位置づけられる。4、教育が技術に隷従する。5、教育による社会的分断を正当化する。情報をいかに獲得するかが、今後のサバイバルのための決めてとなる。

私がここで注目するのは、5、すなわち、サバイバルのための情報アクセスという事態がもたらす社会の分断化である。地球的レベルで求められる調和的な共生は、何も、言語間、民族間、宗教間のみにおいて達成されるべき目標ではない。時間的なレベルにおいてもそれは達成されなくてはならない。情報に対するアクセス能力は、世代間で圧倒的に異なる。10代から20代で、資本、人、情報の自由な横断を経験する世代と、現に、高等教育の現場で教鞭をとるわれわれの多くがそうである40、50代の人間との間には、その点で、今や、ほとんど絶望的としかみえない乖離が生まれ、そのためにディスコミュニケーションが進行している。世代間の断絶はいつの世にもあったが、過剰な情報から必然的に導き出される価値の拡散と、共有される知見の極端な少なさ、という状況に照らして、今日ほど悲劇的な状況はない、といえる。この事態は、たとえば、戦後の記憶をひきずり、なおかつドイツ中心のフマニタスの理念に学び、強い精神的飢餓を経験した世代が現に直面している無力感とも無縁ではない。また、情報アクセスのもっとも先鋭な道具であるコンピュータに習熟するといった技術的な手段でも、その断絶はおそらく克服できない。また、高等学校における教育においても、当然のことながら、そのディスコミュニケーションは、大学以上に顕在化している。この危機的事態は、むしろんわが国における高等教育の指針を決定する文部科学省の危機感につながっており、たとえば大学入試における受験科目数の増加という、これも技術的な手段によってその埋め合わせがなされようとしているが、その成果はきわめて疑わしいといわざるをえない。問題は、文化の継承性をどう考えるか、ということになる。知と教養のあり方を根本から考え直すこと、あるいは伝達すべき知と教養の選別をいかに行うか（ないしは行わないのか）、にまでさかのぼって議論を進めなくてはならない。水林章は、本シンポジウムにおける「新たな反神学のために」と題する講演のなかで、そうした市場化の原理に骨抜きにされた大学における「人文学的教養」の再活性化を説き、「商品世界」から無条件に自由である大学という理想について語ったが、その際に彼がより所としたのは、ジャック・デリダの「無制約・無条件の大学」の概念だった。デリダによれば、「無制約・無条件の大学」とは、「いかなる外的な条件・制約にも縛られない、絶対的な抵抗の場」「あらゆる国家的な権力、あらゆる経済

的な権力、あらゆるメディア権力、イデオロギー的権力、宗教的・文化的権力、要するに來たるべき民主主義を制限するあらゆる権力に抵抗する力」（水林）である。そして抵抗する場として大学がより所とすべき「場」こそ、「ユマニテ les Humanités」と呼ばれる「人文学的教養」、すなわち、「人間と文化にかんする問いである、『文学』と『諸言語』を対象とする学問」、「……芸術であり、法学であり、哲学であり、批判行為としての批評」であるという。「抵抗の場」としてあるべき大学が、具体的にはどのような政治的な力として発現できるのか、また、地球レベルでの新しい希望のもとにそれが機能できる日を、私は水林ほどに力強く確信できていたわけではない。その点で私ははるかにペシミスティックである。なぜなら、グローバリゼーションの猛威による、地球レベルでの知的後退の波は避けえないと考えるからである。グローバリゼーションは私たちにとって所与の条件であり、所与の「富」ですらある。いま、私は、スーザン・ソントアグが『他者の苦痛へのまなざし』(Regarding pains of others, 2003) で書きのこした予言を思い出さざるを得ない。「彼らの苦しみが存在するその同じ地図上に我々の特権が存在する」。これこそは、グローバリゼーションのもっとも恐ろしい真実の姿なのである。しかし、こうしたペシニズムのなかでも、私たちは大学人としてなしえることを一歩ずつ実現していかななくてはならない。今回の21世紀COEプログラム総合シンポジウム『グローバリゼーションと多文化的想像力』を設計するにあたって、私が自分なりに据えようとした目標とは、地球社会化時代において地域的、多元的、多文化的想像力の役割と意味を確認することでも、その再興を願うことでもなかった。そうした視点は、19世紀後半以来の人文学の中心にあった、個別の地域に焦点をあてそれぞれの文化的な特質を明らかにしようとする地域研究の視点とおおよそ変わりがなく、何一つ新味がない。問題は、グローバリゼーションによって地域社会と人間精神がこうむった変容の意味をさぐり、その様態の探求をとおして、クリエイティブな学へとどう創生しなおすかという問いかけだった。そこからは、私たちにはいまだ未知の次元におけるコミュニケーションの問題、新たな意味づけによる神や宗教、文学の問題がその片鱗をのぞかせるだろう。いま求められているのは、ブレイクストーミング的な自由な議論のなかから、私たちの存在様式にとってもっとも切なる問題系を探り出し、その問いを、人文学のさまざまな領域へと派生させ、新たな思考パラダイムのもとに血肉化することではないだろうか。では、そうした問題意識のあり方がめざす究極の人文学とはどのようなものであろうか。すでにこの新しい段階では、従来の個別的な学は、みずからの独立性を失い（あるいは相対化され）、新たな組み合わせの対象としての地位に甘んじなくてはならなくなるかもしれない。なぜなら、グローバル化がもたらした空前の現象とは、あらゆる価値の攪拌であり、攪拌からの価値の創造だからである。シンポジウム初日のCセッションで、「グローバル化時代の《翻訳》」というタイトルのもとに提示された問題とは、すべてのレベルでの「翻訳」という営みにひそむ《境界》を越える、ないしは《越境》という行為がはらむ意味であった。「翻訳」こそは、共存のなかの自立、ないしは自立のなかの共存という、グローバリゼーションがめざすべき一つの理想のもっとも根源的な姿を暗示していると私は思う。最後に繰り返して述べておきたい。私たちは、現にみずからが足場をおく大学から、グローバリゼーションの暴力をかわし、なおかつ、それとの調和的關係を模索していかなければならないということ。そしてその調和のなかから、新しい「人文学的教養」の裾野は、静かに姿を現すだろうということ。